様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１４４

研究課題名（和文）キタープの地域間比較と時代的変容からみる東南アジア・ムスリムの思想・社会の動態

研究課題名（英文）The social and intellectual dynamism of Southeast Asian Muslims: Perspectives from the regional variation of kitabs and change in periods of time

研究代表者
川島　緑（Kawashima, Midori）

上智大学・総合グローバル学部・名誉教授

研究者番号：５０２６４７００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：東南アジアで広く読まれてきた終末論やイスラーム物語をとりあげ、その内容、および、様々なヴァージョンに加えられた改変や注釈を検討し、それぞれの特徴を明らかにした。また、南タイ・トラン県、マレーシア・サバ州、フィリピン・ミンダナオにおけるキタープ（イスラーム書）の使用状況を調査し、大規模なイスラーム寄宿塾が発達しなかったこれらの地域でもマレー語キタープが用いられ、個人や少人数での教授に使用されてきたことを明らかにした。さらに、ミンダナオ島ラナオ地方の「シェイク・ムハンマド・サイド・コレクション」、および、上智大学アジア文化研究所「ミャンマーのイスラーム書コレクション」の解題付き英文目録を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、東南アジアにおけるイスラーム学の伝統的中心地のみならず、従来「周辺部」とみなされてきたマレーシア・サバ州、南部フィリピンも対象に含め、キタープの内容と使用状況を明らかにし、それを通じて、東南アジアにおけるムスリムの知的活動に関する研究を進展させた。さらに、ミンダナオとミャンマーのイスラーム書の先駆的な目録を作成し、両地域のキタープ研究の基礎を築いた。また、東南アジア、特に南部フィリピンや南タイ、ミャンマーのイスラームは、紛争との関連で注目されることが多いが、本研究を通じてムスリムの知的活動への関心を高め、東南アジアのイスラームに対する理解を深めるという社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：We focused on several works of Islamic eschatology and stories of prophets that enjoyed popularity in Southeast Asia, and elucidated their contents, commentaries on them, and modifications made in their adaptations, bringing to light the characteristics of these works and their geographical distribution. We also surveyed the circulation and use of kitabs (Islamic manuscripts and books in the Arabic script) in Trang province in southern Thailand, Sabah state in East Malaysia, and Mindanao in the southern Philippines. Although large-scale traditional Islamic boarding schools did not develop there, Malay kitabs were used for individual use and private or small-group instruction.We also compiled annotated catalogs of two collections of kitabs, namely, Sheik Muhammad Said's collection in Marawi City, Philippines, and the Collection of Islamic Books from Myanmar at the Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies of Sophia University, Tokyo.

研究分野：東南アジア研究、フィリピン近現代史

キーワード：東南アジア　イスラーム　ウラマー　キタープ　知識人　終末論　スーフィズム　物語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

東南アジアのムスリムは、アラビア語のイスラーム書に加え、マレー・インドネシア語（以下、マレー語）、ジャワ語、スンダ語、マラナオ語、タウスグ語等、現地の諸言語をアラビア文字で表記したイスラーム書を用いてイスラーム知識を学び、伝えてきた。本研究では、これらの「アラビア文字表記東南アジア諸言語、および、アラビア語のイスラーム書」を総称して「キターブ」と呼ぶ。

東南アジア諸語のキターブは、東南アジアのムスリムのイスラーム理解や知識伝達、社会認識を知るための重要資料であり、近年では、デジタル技術の進歩や、インターネットによる図書館や文書館所蔵資料の公開の動きも追い風になり、東南アジアのキターブに関する研究が盛んになりつつある。しかし、キターブの数は膨大であり、これまで研究に利用されたキターブは、そのごく一部に過ぎない。また、これまでの研究はマレー語のキターブに集中しており、他の東南アジア諸言語のキターブの研究は大きく後れを取っている。東南アジア全域を対象とした広域の比較研究も不十分である。そこで、これまで研究が欠如していた南部フィリピンを含め、東南アジア諸地域におけるキターブの使用状況と内容を比較検討し、それを通じて東南アジア・ムスリムの知的活動と思想の多様性と共通性を明らかにする研究を企画した。

２．研究の目的

本研究は、マレー半島、ジャワ、ミンダナオ、南部タイを中心として、東南アジアの諸地域で用いられてきたキターブの内容と使用状況を明らかにし、それを通じて東南アジアのムスリムのイスラーム知識伝達とイスラーム理解にみられる共通性、および、地域、時代による特徴を明らかにすることである。特に一般民衆のイスラーム理解に大きな影響を与えてきたイスラーム物語、死と終末に関する作品、宗教的詩歌に注目し、アラビア語原文への注釈（解説）や、東南アジア諸語への翻訳・翻案、再注釈、抜粋・再編の過程でどのような工夫や改変が加えられたかを解明する。また、キターブの流通、および、イスラームの学びや儀礼、日常生活における使用状況を明らかにする。

３．研究の方法

（１）東南アジアのムスリムの間に広まっていたイスラーム物語や世界観・終末論に関する作品のなかから数点の作品を選び、複数のヴァージョンや注釈のテキスト（アラビア語、マレー語、ジャワ語、マラナオ語）を比較検討し、その分析を通じて当該作品の特徴や地域的広がりを明らかにする。

（２）大規模なイスラーム寄宿塾が発達しなかった地域におけるキターブ使用の状況を明らかにするために、東マレーシア・サバ州、南タイ西海岸トラン県、南部フィリピン・ミンダナオ島ラナオ地方において現地調査を実施し、これらの地域におけるキターブの流通、生産、使用、保存の状況を明らかにする。

（３）フィリピン、ミンダナオ島ラナオ地方の「シェイク・ムハンマド・サイド・コレクション」、および、上智大学アジア文化研究所「ミャンマーのイスラーム書コレクション」の解題付き目録を作成し、東南アジアのキターブ比較研究の基盤を整備する。

４．研究成果

（１）特定のテーマのキターブの研究

①　『天国と地獄に関する詳細な情報』とそれに連なる東南アジア諸語キターブの比較研究

アル・カーディー著『天国と地獄に関する詳細な情報』（*Daqāʾiq al-akhbār fī dhikr al-jannah wa-al-nār*）（以下、『詳細な情報』）は、アッラーによる万物の創造、臨終、死後の魂の状態、終末の日と最後の審判、地獄と天国等について詳述したイスラーム終末論の書である。同書は中東、アフリカ、アジアのムスリムの間に広く伝わり、東南アジアのムスリムの間でも読み継がれてきた。川島緑、菅原由美、久志本裕子は、同書のマレー語版とジャワ語版（菅原担当）、マレー語の類書『秘事の顕現』（久志本担当）、マラナオ語の類書『来世の物語』（川島担当）の 4 点のキターブのテキストを分析し、その比較を通じて、それぞれの内容の特徴を明らかにした（表 1 参照）。

この研究を通じて、『詳細な報告』に依拠した、あるいは、直接、間接の影響を受けた終末論のテキストがマレー語話者のみならず、ジャワ語話者やミンダナオのマラナオ語話者にも伝わっていたことを明らかにした。しかし、同様の内容の作品が存在しても、地域、時代によって、それらの作品が持つ意味は一様ではない。『詳細な報告』に加えられた様々な改変は、これらの作品が各地域社会で持つ意味を解明するための手がかりとなる。マレー語の類書『秘事の顕現』には、他のキターブに依拠する内容や、著者の想像や解釈にもとづくと思われる叙述が追加されている。マラナオ語の類書『来世の物語』にも様々なアレンジが加えられており、その分析を通じて、この作品には社会道徳啓蒙という著者の意図が込められていることを明らかにした。これらの研究成果にもとづく英文論文集を 2020 年度に刊行予定である（①）。

東南アジアには、他にも様々な終末論のキターブが存在する。今後は他の作品も検討し、これらの作品が当該社会に与えた影響を明らかにしつつ、本研究をさらに発展させていく。

表1. 『天国と地獄に関する詳細な情報』とそれに連なる東南アジア諸語の終末論のキターブ

作品の略称	A:『詳細な情報』アラビア語版	B:『詳細な情報』マレー語版	C:『詳細な情報』アラビア語・ジャワ語対訳	D:『秘事の顕現』マレー語	E: 来世の物語』マラナオ語
著者、訳者	ʿAbd al-Raḥīm ibn Aḥmad al-Qāḍī	Aḥmad ibn Muḥammad Yūnus Lingga	訳者不明	Zayn al-ʿĀbidīn ibn Muḥammad al-Faṭānī	Panggaga Mickey
稿本完成時期	1627年以前	1894年	不明	1883年	不明
確認できる最初の刊本発行時期と場所	1880－81年（カイロ）	1904年（シンガポール）	n.d.（スラバヤ）	1884年（マッカ）	1930年代（ミンダナオ島ラナオ地方）
構成と内容	万物の創造、死、墓での経験、終末、来世に関するハディース集。	Aのほぼ忠実なマレー語訳。	Aのほぼ忠実なジャワ語訳。	概ねAと共通だが、復活の日と天国に関する詳しい叙述を追加。	A, B, Dと類似の内容を含むが、他の内容のテキストも含む。

② マレー語キターブにおける「ムハンマドの光」の表現とスーフィズムの世界観の研究

塩崎悠輝は、スーフィズムの世界観にとって重要な「ムハンマドの光」の概念に注目し、この概念がマレー語の詩を通じて東南アジアで受容されていく過程を明らかにした。

東南アジアのイスラームについて研究するうえで、イスラームの普及が現地社会の世界観をどのように形成していったのか、ということは重要なテーマである。この研究テーマについては、中東やアフリカ、中央アジア等の社会についてもすでに多くの蓄積がある。世界の創造の過程、世界の構造、人間やその他の被造物についての理解は、イスラームが東南アジアで個人や社会の指針として受け入れられるようになっていく過程で、ムスリム社会に共有された知の体系の基礎となった。

本研究が対象とする 15 世紀から 19 世紀にかけては、中東からインドを経由してもたらされた、スーフィズム思想に基づく世界観が東南アジア島嶼部に普及していった時代である。この世界観の核となったのが「ムハンマドの光（Nūr Muḥammad）」の概念である。「ムハンマドの光」はアッラーによる最初の被造物であり、人間を含む全ての被造物と世界の原料となったとされている。また、「ムハンマドの光」は現世においては預言者ムハンマドとして現れ、イスラームの教えを伝えたとされる。この世界観は、イスラーム世界に広く影響を持つ存在一性論思想の一類型である。

東南アジアでは、「ムハンマドの光」についての知識はスーフィズムの奥義として伝承されるとともに、詩や物語などの文学において多様な比喩を用いて表現され、東南アジア社会のイスラーム的世界観を形成していった。本研究では、マレー語でスーフィズム思想を表現した詩を分析することで、東南アジアで「ムハンマドの光」の概念が多様に表現され、受容されていった歴史的過程を明らかにした。この研究成果は英文図書として近刊予定である(②)。

③ ガイティー著『預言者のミウラージュ物語』のダルディールによる注釈の研究

預言者ムハンマドの天上界への夜旅を描いた「イスラー・ミウラージュ」（夜の旅と昇天）物語には様々なヴァージョンとそれらの注釈がある。マレーシアやインドネシアのイスラーム寄宿塾で学ぶ人々の間では、16 世紀エジプトのイスラーム学者、ナジュムッディーン・ガイティーが著わした『預言者のミウラージュ物語』を 18 世紀エジプトのイスラーム学者ダルディールが解説したヴァージョン（同書の注釈）が広く知られている。茂木明石はこのダルディールの注釈に注目し、アラビア語テキストの分析を通じて、そこに新たな解釈が含まれていることを明らかにした。

ガイティー著『預言者のミウラージュ物語』については、ダルディールの注釈も含めて、オスマン朝統治期カイロでは、ウジュフーリー（1655 年没）、カルユービー（1658 年没）などによって注釈が書き継がれてきた。従来、これらの注釈はイスラーム史初期の著作と比較して、オリジナリティに乏しく、過去の説の繰り返しに過ぎないとして、研究者たちからは軽視され、研究対象としてまともに取り上げられてこなかった。近代以降、初期に著された原典を重視する原理主義的な傾向が強まり、この時代に書かれた注釈が近代化を阻害する要因とみなされたことも、注釈の研究に大きな価値を認めない原因の一つとなっている。

しかしながら、これらの注釈の記述を詳細に分析した結果、注釈に対する従来の評価は一面的なものであり、少なくともこれらの注釈には革新的な要素がそれなりに盛り込まれていることが明らかになった。具体的には、預言者ムハンマドが夜旅の際に乗ったという空想的な動物、ブラークの説明に関するこれらの注釈の記述の中にそれ以前の時代には見られなかった新しい解釈が認められる。これらの注釈の中で新しい解釈の発展がみられるのは、ブラークは何者か、ブラークはどこから来たのかといった問題である。カルユービー、ダルディールは、ブラークについて、神が楽園から派遣した天使のようなものとして描き出している。ウジュフーリーは両者ほど明確ではないが、ブラークの男性でもない女性でもない両性的な性格について、天使との関係を思わせる説明を加えている。

初期のハディースその他の著作では、ブラークが神によって遣わされたことについて、何も言及されていない。時代が下るにつれて、ブラークが楽園におり、楽園から来たようだということを伝える記述は少しずつ増えていく。それらの記述を踏まえて、注釈の著者たちは、神が楽園から派遣した天使に類するものというブラークの性格付け

を新たに造り出したのである。このことは、これらの注釈が過去の説の繰り返しではなく、新しい解釈を含むものであることを示している。この研究成果にもとづく英文論文を2020年度に刊行予定である（①）。

（2）キタープの使用からみるイスラーム知識の伝達と継承

① 東マレーシア・サバ州コタ・ブルド郡イラヌン人集落におけるキタープ使用（2017年8月、11－12月、2018年6月8月：川島緑、久志本裕子）

サバ州のイラヌン人はフィリピン、ミンダナオ島のマラナオ人、イラヌン人等と同系言語を話し、共通のルーツを持つ人々である。本調査はイラヌン人が集中して居住するランパヤン・ウル、ランパヤン・ラウトの2村を中心として実施した。両村には1970年代まで小学校がなく、近年まで村内にイスラーム学校もなかったため、村人は家庭内や礼拝所などでクルアーンの詠み方を学ぶことが一般的であった。

この地区では、キタープは家系を通じて子孫に継承され、特に古い写本は門外不出の家宝として秘蔵されるため、他人が見せてもらうことが難しい。本調査では、所有者の許可を得て写本3冊、刊本14冊のキタープを閲覧・写真撮影した。この調査を通じて、この地区におけるイスラームの伝達・継承について以下の点が明らかになった。

a. 使用言語は、アラビア語の祈祷文やクルアーンの章句などを除き、すべてマレー語であり、住民の母語であるイラヌン語で記されたものはなかった。聞き取り調査でもイラヌン語のキタープの存在についての情報は得られなかった。これは、マレー語が、マレーシアの国語であり、同地区に居住し通婚関係もある他のエスニック集団の共通語として日常的に広く用いられているためと思われる。

b. テキストの内容はイスラーム法学、祈祷書、まじない・護符、シャイル（マレー語4行詩）、預言者ムハンマド讃歌集、クルアーン読誦法、預言者物語、マレー伝統医療、暦学書などで多岐にわたる。イスラームに関する初歩的知識、日常生活に役立つ知識など、一般の人にわかりやすい内容のものが多い。シャイルやムハンマド讃歌等の詩歌は朗誦を前提として書かれたものであり、物語も語られることが多いので、これらは、知識人層以外の住民にイスラームの知識を伝える上で重要なメディアであったと考えられる。

c. 宗教的詩歌によるイスラーム知識伝達の伝統は、現代にも引き継がれている。これを示すのが、シャイル「墓の詩」の近年の復興である。「墓の詩」は、人間が臨終を迎え、葬儀を経て墓の中で体験することを語り、その時に後悔しないよう信仰に励むことを説く。19世紀末にシンガポール等で出版されたこのシャイルはサバ州のイラヌン人にも伝わり、1970年代までラジオやカセットテープを通じて村人の間に広まっていたが、その後、半島部のマレー語歌謡の流行に伴い衰退していった。しかし、村のイマームたちが「墓の詩」のキタープ刊本の所有者からそれを借りて同一テキストの新版を作成し、その後、折に触れて歌うようになった。こうして「墓の詩」は、イラヌン歌謡の影響を受けた独特の節回しに乗せて、死と来世に備えることの重要性を人々の心に訴え続けている。

これらの成果は2020年度中に英文報告書にまとめ、速やかに刊行を予定している。サバ州イラヌン人のイスラーム知識の内容や伝達、イスラーム理解に関しては、これまで研究が欠如していたため、本研究はこのテーマに関する研究の基礎を築くものとして大きな意義を持つ。今後は、キタープの内容の精査と補足調査によりこの研究をさらに深めていきたい。

② 南タイ西海岸トラン県M村におけるイスラーム書使用（2019年12月：小河久志）

トラン県のムスリム人口は県人口の16%に過ぎないが、調査対象のM村は住民約1000人すべてがムスリムである。50年程前までは村内ではマレー語が日常的に話されていたため、60歳代以上の村人はタイ語とマレー語のバイリンガルであるが、50歳代以下の世代はタイ語を日常的に用いている。M村で使用されている主なイスラーム書には3種類があり、それらの呼称、内容、使用言語、使用状況は以下のとおりである。

a. 「マウリド書」(nangsu' morot)：預言者讃歌。アラビア語。以前はマウリド（預言者ムハンマド誕生祭）および、結婚式、妊娠7か月目の水浴儀礼などの通過儀礼の際に、決められた詠み方で朗誦されていたが、現在は「ヤーシーン章」に取って代わられており、「マウリド書」を保有する人や詠める人もほとんどいない。

b. 「ヤーシーン書」（nangsu' yasin）：クルアーンのヤーシーン章。アラビア語。以前から葬式において詠まれてきたが、現在では「マウリド書」に代えて結婚式などの通過儀礼でも詠まれるようになった。この変化が生じた要因としては、ムハンマドを崇敬対象とすることに否定的なイスラーム復興運動（dawa）やイスラーム教育の影響があげられる。

c. 「キタープ書」（nangsu' kitab）：イスラーム学の書。アラビア語、ジャウィ語（アラビア文字表記マレー語）、タイ語。2000年、M村に公的イスラーム教育機関（モスク宗教教室）が設置されて以降、タイ語で書かれたキタープが主流であったが、この数年、これまで衰退傾向にあったインフォーマルなイスラーム教育機関（クルアーン塾）が復活し、アラビア語で書かれた「キタープ書」を使用する学習者が増えている。この背景には、教育内容をめぐるイスラーム復興運動の担い手の世代間対立がある。第一世代（50歳代以上で、公的イスラーム教育機関の管理・運営にあたる人）は、クルアーン朗唱・暗唱だけでなくイスラーム全般に関する基礎知識を重視するのに対し、第二世代（20～40歳代で、クルアーン塾の管理・運営にあたる人）は、クルアーン朗唱・暗唱を重視する傾向があり、後者の台頭に伴い、アラビア語の「キタープ書」使用が拡大しつつある。

このように、イスラーム復興運動の浸透、および、その新世代指導者の登場により、M村におけるイスラーム書の使用において新たな変化が起きていることが明らかになった。この調査の成果は、2020 年度中に英文論文を通じて発表予定である。

（3）キターブの解題付き目録（英文）作成

① フィリピン南ラナオ州マラウィ市「シェイク・ムハンマド・サイド・コレクション 」

本コレクションは民間で継承されてきた 18 世紀半ばから 20 世紀半ばまでのキターブ写本・刊本計 65 冊からなる。川島は本研究開始以前に、海外研究協力者の協力を得て現地でキターブのデジタル画像撮影を終了しており、本研究では書誌データの作成、キターブの内容の分析、解題執筆、これらのキターブにもとづく論文 5 点の執筆を行った（③）。

従来、南部フィリピンは東南アジアでイスラームが最後に伝わった場所であり、特に内陸部に位置するラナオ地方はイスラーム受容の時期が最も遅く、近隣のマレー語圏イスラーム地域や中東との交流は間接的で、現地の土着文化と混淆したイスラーム ―「フォーク・イスラーム」― が実践されているとみなされてきた。しかし、本コレクションの分析を通じて、そのテキストの大半は東南アジアの島嶼部他地域で広く流通していたテキストと共通であることが明らかになった。このことは、18 世紀末から 20 世紀初頭にかけて東南アジア島嶼部で学ばれていたイスラームの知識は、これまで考えられていたよりもはるかに均質性が高かったことを示している。

この目録は南部フィリピンのキターブに関する初めての専門的な目録であり、海外の学術雑誌の書評でもとりあげられ、個別の写本ではなくコレクション全体を分析対象としている点、および、個々の写本についてその地域の文脈のなかで詳細に検討している点を高く評価された（④）。今後はこれにもとづいて南部フィリピン・ムスリムの知的営為に関する研究が大きく進展することが期待できる。

② 上智大学アジア文化研究所「ミャンマーのイスラーム書コレクション」

本コレクションは NIHU イスラーム地域研究・上智大学研究拠点「東南アジアのイスラーム研究グループ」が 2011 年にミャンマーで収集し、同学アジア文化研究所が所蔵する 82 タイトルのイスラーム書で構成される。これらのイスラーム書には、ビルマ語、ウルドゥー語、アラビア語が使用されており、本研究では、各言語に熟達した研究者である斎藤紋子、須永恵美子、柳谷あゆみの各氏に協力を依頼し、全体の統括は川島が担当して解題付き目録を作成した（⑤）。収集したキターブの数はミャンマーで当時流通していたイスラーム書のごく一部に限られるが、本目録はミャンマーのイスラーム書をリスト化した初めての試みであり、これを通じてミャンマーのムスリムが学んできたイスラーム知識の一端が明らかにされ、ミャンマーと南アジアのムスリム間の知的つながりを確認することができた。この目録を出発点として、ミャンマーのムスリムの知的営為、および、ミャンマーと南インドをつなぐイスラームの知的、人的ネットワークに関する研究の発展が期待できる。

（4）海外の研究機関、研究者とのネットワーク形成

インドネシア（菅原、塩崎）、マレーシア（川島、久志本）、ブルネイ（久志本）、フィリピン（川島）、エジプト（茂木）の研究機関や図書館、文書館等を訪問して文献調査を行うとともに、海外の研究者と交流して研究上のネットワーク形成を進めた。今後は、このネットワークを活用して国際共同研究と国際的成果発信を推進していく。

＜引用文献＞

① Sugahara Yumi (ed.) 2020. (forthcoming). *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs* (6), Sugahara Yumi (ed.), Tokyo: Center for Islamic Studies, Sophia University. (SIAS Working Paper Series).
Other authors: Kawashima Midori, Kushimoto Hiroko, Moteki Akashi, and Shine Toshihiko.

② Shiozaki Yuki. (forthcoming). “Analytic Survey: Sufi Poetry in Malay.” *Encyclopedia of Islamic Mysticism: The Handbook Series Volume Two: Poetry*. Alexander Knysh and Bilal Orfali (eds.). Leiden: Brill.

③ Fathurahman, Oman, Kawashima Midori, and Labi Sarip Riwarung (eds.). 2019. *The Library of an Islamic Scholar of Mindanao: The Collection of Sheik Muhammad Said bin Imam sa Bayang at the Al-Imam As-Sadiq (A.S.) Library, Marawi City, Philippines: An Annotated Catalogue with Essays.* (Occasional Papers No.27). Tokyo: Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University.
Other authors: Annabel T. Gallop and Ervan Nurtawab.

④ Hijaz, Mulaika. 2020. “Oman Fathurahman, Kawashima Midori, and Labi Sarip Riwarung (eds.). *The Library of an Islamic Scholar of Mindanao: The Collection of Sheik Muhammad Said bin Imam sa Bayang at the Al-Imam As-Sadiq (A.S.) Library, Marawi City, Philippines: An Annotated Catalogue with Essays.* Tokyo: Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University. (Occasional Papers No.27).” *Archipel*, 99: 310-312. (Book Review).

⑤ Saito Ayako, Sunaga Emiko, and Yanagiya Ayumi. 2020. “A Catalogue of the Collection of Islamic Books from Myanmar at Sophia University.” *Comparative study of Southeast Asian Kitabs (5): Beyond Insular Southeast Asia*. Kawashima Midori (ed.), Tokyo: Center for Islamic Studies, Sophia University. 2020, pp.37-84. (SIAS Working Paper Series, No.31).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 菅原由美	４．巻 79 (1)
２．論文標題 東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立	５．発行年 2018年
３．雑誌名 史苑	６．最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00017929	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 市野澤潤平・小河久志	４．巻 21
２．論文標題 タイ東部における観光ダイビング産業の発展 ： 南部と差別化された〈棲み分け〉の構造	５．発行年 2018年
３．雑誌名 共同研究　多民族社会における宗教と文化	６．最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000416	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川島緑	４．巻 44
２．論文標題 ミンダナオ戒厳令とイスラーム過激派　――マラウィ市襲撃事件の構図	５．発行年 2017年
３．雑誌名 外交	６．最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/gaikou/vol44.html	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 塩崎悠輝	４．巻 91-2
２．論文標題 大川玲子著『チャムパ王国とイスラーム』(書評)	５．発行年 2017年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 304-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20716/rsjars.91.2_304	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiroko Kushimoto	４．巻 4-4
２．論文標題 Problems of Islamic education in colonial and post-colonial Malaysia: an analysis based on al-Attas’s notion of knowledge	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Jurnal Qalbu	６．最初と最後の頁 80-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　7件／うち国際学会　11件）

１．発表者名 Midori Kawashima
２．発表標題 Legacy of “Sayyidna” Tuan Muhammad Said of the Lake Lanao Region in Mindanao
３．学会等名 Annual Philippine Studies Conference, “Mindanao: Cartographies of History, Identity and Representation" School of Oriental and African Studies, The University of London（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島緑
２．発表標題 19世紀～20世紀初頭ミンダナオ島ラナオ地方における紙の流通―イスラーム写本に使用された紙の検討を通じて―
３．学会等名 東南アジア学会関東地区例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島緑
２．発表標題 19世紀～20世紀初頭ミンダナオ島ラナオ地方における紙の流通―イスラーム写本に使用された紙の検討を通じて―
３．学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島緑
２．発表標題 20世紀前半マラナオ語終末論テキストにみるマレー語キターブKashf al-Ghaibiyahの影響とその他の要素
３．学会等名 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキターブ比較研究：テキストと儀礼からみる東南アジア・ムスリムの来世観」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Midori Kawashima
２．発表標題 Paradise and hell in the Khabarol Akhirat and other Maranao storeis on eschatology
３．学会等名 Workshop on Comparative Study of Southeast Asian Kitabs: Concepts of the Hereafter, Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University, Tokyo
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Sunan Bonang's teaching: Theology and Sufism in 16th century Java
３．学会等名 International Conference "Java in Jerusalem: New Directions in the Study of Javanese Literature and Culture" The Israel Institute for Advanced Studies, Jerusalem, Israel（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Convened Panel "Rethinking the Process of Islamization: Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts"
３．学会等名 The 11th International Convention of Asia Scholars (ICAS11), Leiden University, the Netherlands（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 マレー語版Daqa'iq al-Akhbarにみる天国と地獄
３．学会等名 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキターブ比較研究：テキストと儀礼からみる東南アジア・ムスリムの来世観」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Balance between Islam and politics reflected in Babad Dipanegara
３．学会等名 Farewell symposium for Willem van der Molen upon his retirement from KITLV “Towards a History of Javanese Literature”, Leiden University, the Netherlands（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Paradise and hell: Daqa’iq al-Akhbar translated for the Malay world
３．学会等名 Workshop on Comparative Study of Southeast Asian Kitabs: Concepts of the Hereafter, Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University, Tokyo
４．発表年 2020年

１．発表者名 小河久志
２．発表標題 「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム―南タイにおけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―
３．学会等名 日本文化人類学北陸地区研究懇談会第155回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 塩崎悠輝
２．発表標題 マレーシアにおける「イスラーム国」支援者の背景：イスラーム運動の多様化と分断
３．学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 塩崎悠輝
２．発表標題 スーフィズムの世界観と近代における葛藤　マレー語スーフィー文学の変遷
３．学会等名 大阪経済法科大学哲学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuki Shiozaki
２．発表標題 Representations of Nur Muhammad (Light of Muhammad) and Sufistic worldview in modern Malay kitabs
３．学会等名 Workshop on Comparative Study of Southeast Asian Kitabs: Concepts of the Hereafter, Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University, Tokyo
４．発表年 2020年

１．発表者名 久志本裕子
２．発表標題 19世紀パタニのキタブKashf al-Ghaibiyahにおける天国と地獄の描写とハディースの引用
３．学会等名 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキタブ比較研究：テキストと儀礼からみる東南アジア・ムスリムの来世観」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroko Kushimoto
２．発表標題 Description of paradise and hell and quotations from Hadith in the Kashf al-Ghaibiyah
３．学会等名 Workshop on Comparative Study of Southeast Asian Kitabs: Concepts of the Hereafter, Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University, Tokyo（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 茂木明石
２．発表標題 ガイティー著「預言者のミウラージュ物語」についてのカルユービーとダルディールの注釈の比較検討
３．学会等名 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキターブ比較研究：テキストと儀礼からみる東南アジア・ムスリムの来世観」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuki Shiozaki
２．発表標題 Waqf for Education in Malaysian History: Pondok, Sekolah Agama, and Private Madrasa
３．学会等名 International Conference on History and Governance of Awqaf in South and Southeast Asia: Colonial Interventions and Modern States. Kuala Lumpur.
４．発表年 2018年

１．発表者名 塩崎悠輝
２．発表標題 ロヒンギャ難民の再定住を考える　マレーシアでロヒンギャ難民の受け入れは公共の問題となりうるか？
３．学会等名 上智大学アジア文化研究所主催・イスラーム研究センター共催シンポジウム「ロヒンギャ難民をめぐる公共圏　― ビルマ、マレーシア、インドネシア、パキスタンにおける排除と包摂」（Sophia Open Research Weeks2018）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Sunan Bonan’s teaching: Theology and Sufism in 16th Century Java
３．学会等名 International Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, Osaka University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 The Admonitions of Seh Bari
３．学会等名 “New Directions in the Study of Javanese Literature”, Israel Institute for Advanced Studies, Hebrew University of Jerusalem, State of Israel（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小河久志
２．発表標題 自己のためか、他者のためか－タイ南部インド洋津波被災地におけるタブリーグの「開発」活動をめぐって－
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島緑
２．発表標題 19世紀初頭東南アジアのイスラーム・ネットワークのなかのミンダナオ　―写本と口承からみるサイイドナー・ムハンマド・サイドの旅
３．学会等名 東南アジア学会関東地区例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 川島緑
２．発表標題 イスラーム・ネットワークのなかのミンダナオ　―写本と口承から見るサイイドナー・ムハンマド・サイドの旅（19世紀初頭）
３．学会等名 東南アジア学会第97回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 小河久志
２．発表標題 宗教NGOの支援活動が生み出す新たな関係性－タイ南部インド洋津波被災地の事例から
３．学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuki Shiozaki
２．発表標題 Interreligious Reconciliation in the East Asian Context: Minority Muslim Perspective toward Faith Alliance
３．学会等名 International Conference and First Global Islamic Reconciliation Summit（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 塩崎悠輝
２．発表標題 マレーシアにおけるロヒンギャ難民問題　難民の公共圏への参加のための諸課題
３．学会等名 NIHU現代中東地域研究上智大学拠点＜政治社会学班＞ロヒンギャ難民問題に関する研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroko Kushimoto
２．発表標題 Problems of Islamic Education in Colonial and Post-colonial Malaysia: An Analysis based on al-Attas’s notion of knowledge
３．学会等名 International Ulama Conference 2017, Center for Advanced Study on Islam, Science and Civilization (CASIS)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroko Kushimoto
２．発表標題 Counter-discourse of Islamic Epistemology in Non-Formal Islamic Learning in Malaysia
３．学会等名 ASIA International Multidisciplinary Conference (AIMC 2016), Universiti Teknologi Malaysia（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計16件

１．著者名 Oman Fathurahman, Kawashima Midori, Labi Sarip Riwarung (eds.), other authors: Annabel Teh Gallop, Ervan Nurtawab	４．発行年 2019年
２．出版社 Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University	５．総ページ数 482
３．書名 The Library of an Islamic Scholar of Mindanao: The Collection of Sheik Muhammad Said bin Imam sa Bayang at the Al-Imam As-Sadiq (A.S.) Library, Marawi City, Philippines: An Annotated Catalogue with Essays (Occasional Paper No.27)	

１．著者名 Ismail Hakki Kadi & Andrew Peacock (eds.), Giancarlo Casale, Annabel Teh Gallop, Rifat Gunalan, Patricia Herbert, Jana Igunma, Midori Kawashima and Michael Talbot	４．発行年 2019年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 1037
３．書名 Ottoman-Southeast Relations, Sources from the Ottoman Archives, vol.2	

1．著者名 Midori Kawashima (ed.), Yuki Shiozaki, Yasuko Yoshimoto, Ayako Saito, Emiko Sunaga, Ayumi Yanagiya	4．発行年 2019年
2．出版社 Center for Islamic Studies, Sophia University	5．総ページ数 94
3．書名 Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (5): Beyond Insular Southeast Asia (SIAS Working Paper Series 31)	

1．著者名 Yumi Sugahara (ed.), Midori Kawashima, Hiroko Kushimoto, Akashi Moteki, Toshihiko Shine and Yumi Sugahara	4．発行年 2020年
2．出版社 Center for Islamic Studies, Sophia University	5．総ページ数 -
3．書名 Comparative study of Southeast Asian Kitabs (6) (SIAS Working Paper Series)	

1．著者名 石森大知・丹羽典生（編）、岡部真由美、藏元龍介、倉田誠、丹羽典生、石森大知、小河久志、白波瀬達也、奈良雅史（著）	4．発行年 2019年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 448
3．書名 宗教と開発の人類学－グローバル化するポスト世俗主義と開発言説－	

1．著者名 塩崎悠輝	4．発行年 2019年
2．出版社 上智大学イスラーム研究センター	5．総ページ数 94
3．書名 ロヒンギャ難民の生存基盤－ビルマ／ミャンマーにおける背景と、マレーシア、インドネシア、パキスタンにおける現地社会との関係－(SIAS Working Paper Series No. 30)	

1．著者名 Stephane Lacroix, Yuki Shiozaki, and Yokota Takayuki	4．発行年 2019年
2．出版社 上智大学イスラーム研究センター	5．総ページ数 48
3．書名 The Muslim Brotherhood within Islamic geopolitical dynamics: Developments in Saudi Arabia, Malaysia, Indonesia, and Egypt. (SIAS Lectures. Vol. 2)	

1．著者名 小泉 順子（編著）、菅原由美、伊東利勝、片山須美子、小林寧子、左右田直規、原田正美、土佐桂子	4．発行年 2018年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 340 (223-252)
3．書名 歴史の生成　―叙述と沈黙のヒストリオグラフィー	

1．著者名 Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa (eds.), Yumi Sugahara, Hisashi Ogawa et al.	4．発行年 2018年
2．出版社 ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.	5．総ページ数 341
3．書名 Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia, vol.2: Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia	

1．著者名 Willem van der Molen, Yumi Sugahara (eds.)	4．発行年 2018年
2．出版社 ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies	5．総ページ数 182
3．書名 Transformation of religions as reflected in Javanese texts (Javanese studies series 5)	

1．著者名 アブドゥルハミード・アブースライマーン（著）、塩崎悠輝・出水麻野（訳）	4．発行年 2017年
2．出版社 作品社	5．総ページ数 307
3．書名 クルアーン的世界観　近代 をイスラームと共存させるために	

1．著者名 笹川平和財団（編）、小河久志、久志本裕子、石川和雅、岩城考信、香川めぐみ、日下部尚徳、斎藤紋子、櫻田智恵、佐々木葉月、鈴木佑記、拓徹、中村沙絵、見市建、山田協太、渡邉暁子（著）	4．発行年 2018年
2．出版社 イーストプレス	5．総ページ数 336
3．書名 アジアに生きるイスラーム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅原　由美 (Sugahara Yumi) (80376821)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授 (14401)	
研究協力者	塩崎（久志本）　裕子 (Shiozaki-Kushimoto Hiroko) (70834349)	上智大学・総合グローバル学部・准教授 (32621)	
研究協力者	茂木　明石 (Moteki Akashi)	上智大学・アジア文化研究所・客員研究員 (32621)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	小河　久志 (Ogawa Hisashi) (50584067)	金沢星稜大学・人文学部・准教授 (33301)	
連携研究者	塩崎　悠輝 (Shiozaki Yuki) (00609521)	静岡県立大学・国際関係学部・准教授 (23803)	